

大陸から
遙か遠き
蓬萊の地へ

徐福渡来伝説

およそ2200年前、秦国の始皇帝から命を受け、
不老不死の薬を探するため、海の彼方へと旅立った徐福。
その足跡は日本各地で語り継がれているが、
徐福の墓が残されているのは、和歌山県新宮市のみ。
伝説の薬木『天台烏薬』が生い茂る熊野の地は
今も、歴史の謎とロマンに彩られている。



東海の仙境への旅立ち

2200年という気の遠くなるような
遙か昔、黒潮につて熊野へやってきたと
言われる徐福。今でも新宮市の人々は、
彼のことを親しみを込めて「徐福さん」と
呼ぶ。

この謎に満ちた人物が登場する最も
古い書物は、前漢の時代に司馬遷によて
記された中国の歴史書『史記』。これに
よると、紀元前219年に始皇帝が斉の
国を訪れた際、徐福というひとりの方士
が「海に向こうに蓬萊、方丈、瀛洲とい
う三つの神山があり、そこへ行けば不老
不死の仙薬が手に入ります。神に献上
するための童子童女を引き連れて、こ
の私が探しに行きましょう」と進言。戦
国時代を経て6ヶ国を統一した始皇帝は、
不老不死の身となつて永遠に権力を手に
することを夢見ていたため、大いに喜び

徐福に蓬萊行きを命じたという。
方士とは、不老長生術や呪術、占術、
薬学、天文学などを極めた学者のよう
な身分。長い間、新宮市で徐福研究を
続けている奥野利雄氏によると、「始皇
帝は300人もの方士を抱えていたそう
ですが、徐福は、その中でも一際すぐれた
才能を持っていたでしょう。史記には
書かれてませんが、始皇帝に仙薬の話
を持ちかけたのは60歳のころだと推定さ
れています」。

徐福は、暴君始皇帝の圧政から逃れて
東海の異国で暮らすために、この夢物語で
始皇帝を欺いたとも言われている。その一
方で、有能な方士を疎ましく感じていた
始皇帝が、徐福を海の果てに追いやり、そ
の間に族を滅ぼすべく、わざと申し出を受
け入れたという説もある。

さまざまな思惑を乗せた船旅は、暴風
雨に遭うなど波乱の連続で、3000人の

ないヒミツを教えてください。

「実は徐福たちが上陸した時期は、
和歌山に弥生文化が定着した時期と、
ほぼ重なるんです。阿須賀神社周辺から
は、10基以上の弥生時代の竪穴式住居
跡や土器がたくさん発見されています。
今でも家の建て替えなどで地面を掘り
起こす度に、いろんなモノが出てきま
すよ」。一般に稲作などの大陸文化は、
朝鮮半島を経由して九州へ伝わり、そ
から全国へ広まったことになっている。し
かし、徐福たちと共に熊野へ渡来した別
ルートがあったとしたら……遠い時代に
思いを馳せるほどに、ロシは膨らみ続け
る。

不老不死の仙薬、天台烏薬を見つけた
徐福たち一行は、温暖な気候と恵まれた
自然環境、そして熊野の人々の優しさに触
れ、この地に永住を決める。彼らは蓬萊山
と海岸の間に集落を作つて暮らしはじめ、
秦へ戻ることは一度とかなたという。黒
潮に導かれた旅人を温かく受け入れる紀
州人のおおらかさは、おそらく遠い昔から変
わらないものなのだろう。

徐福はその後、青森や伊豆七島、富士
山を訪れるなど、全国各地に伝説を残し
ている。大陸とは比べようのない小さな島
国とはいえ、これほど広い範囲にわたつて足跡
があるのは驚くべきことだ。ましてや、徐
福はすでに70歳を超えていたはず……不
老不死という言葉が、頭をよぎる。

このように徐福の伝説や謎は尽きない
が、最大の謎は「徐福は本当にいたのか」
ということだ。史記には徐福に関する

行がようやく蓬萊へ辿り着いた時には、最
初の航海から9年もの月日が流れていた。

「大陸の東海にある蓬萊とは、伝説上
の桃源郷のようなものですね。そこに住む
仙人が不老不死の薬を持っている
と、徐福は本当に信じていたのかもしれま
せん。熊野のほかに富士山や名古屋市の
熱田も、昔は蓬萊と呼ばれていたそうです」
と奥野氏は語る。

徐福たちの最初の寄港地はおそらく今
の佐賀県、そして黒潮に乗って最終的に上
陸した蓬萊の地は、新宮市の蓬萊山近く
だと考えられている。近年、中国の研究者
が秦の時代の造船所跡を調査したところ、
その技術は予想以上に高度で、6トン
級の大型船を建造していたことが明らか
になった。一隻の定員は100人前後、つま
り8隻が必要になる。すべての船が熊野
へ到着したわけではないにしろ、徐福たちの
上陸は、さながら紀元前の黒船来襲のよ
うなケルだったに違いない。

弥生時代の幕開け

現在の蓬萊山は、ちょうど伏せた
茶碗のような佇まいだ。標高わず
か50mながら、神々が降臨すると信

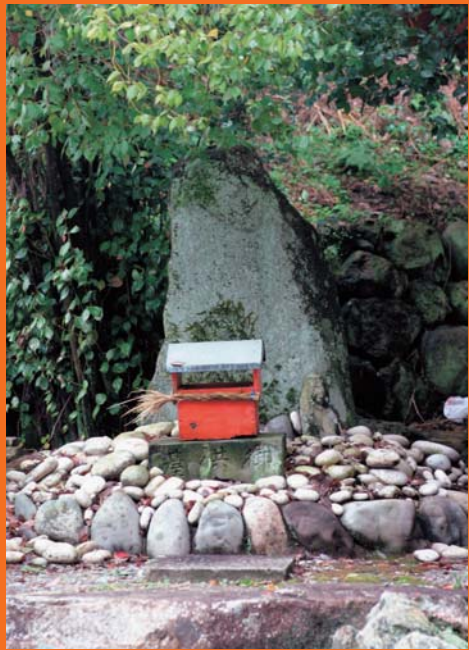


徐福が発見したと言われる天台烏薬。中国では健胃や
強壯の漢方薬として、その根を煎じて飲む。写真の根は
新宮市立歴史民俗資料館に展示された50～60年もの。



江戸末期の「西国三十三ヶ所名所図会」にある「新宮湊」のページに登場する徐福渡来の挿し絵。徐福とその一行が熊野に到着し、船から宝物などを降ろす風景が描かれている。

Wonder Zone in WAKAYAMA 【特集】……③ ワンダーゾーン和歌山



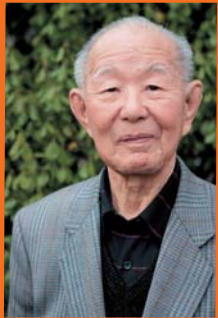
徐福公園に建つ徐福の墓。紀州産の緑泥片岩で作られた墓石に刻まれた文字は「秦徐福之墓」。



天台烏薬の葉も根とほぼ同じ成分があることが判明し、葉の部分を使って作られるお茶や果実酒、入浴剤などは、新宮市を代表する特産品に。



1994年に新宮市駅のそばに造られた「徐福公園」。徐福の七重臣にちなんで、公園の不老の池には和、仁、慈、勇などと書かれた石柱7本が建ち、ここを渡ると長生きするといわれている。



奥野利雄さん、1911年生まれ、新宮市立歴史民俗資料館長を歴任し、現在は財団法人新宮徐福協会理事。

地図中の●印は徐福伝説が残る場所。徐福たちは秦を出発した後、現在の佐賀県あたりに寄港し、その後、新宮へ上陸したと考えられている。



は49歳でこの世を去ったのである。
21世紀に蘇った徐福
遙か彼方の大陸を見つめているかのよう
うに佇む徐福の墓は、紀伊藩の初代藩
主である徳川頼宣が熊野を訪れた時、
阿須賀神社に祀られた徐福の話を知り
て建てさせたもの。そのまわりに並ぶ天
台烏薬は、クワキ科の背の低い常緑樹で、
春になると小さな淡黄色の花をつける。
新宮市内でも栽培されており、その総数
は15万本以上にも達するとか。その名

たとえ身体は 滅びようとも その魂は 永遠に生き続ける



漢文の一節は「後の世の人が昔のことを
思い見るのは、丁度、月夜の晩に遙か遠
方を眺めるようなものである。そこには
何かあることはわかっているが、その形を
はきり知ることとはできない。徐福が熊
野に来たこともそれと同じで、詳細はわ
からないが、来たことは事実である」と
いう意味だ。当時の人々には予想もで
きなことがたが、後の世のハイテクに
よて、長い月夜が明け、新たな太陽が
遠方までをくつきりと照らし出すこと

の原因となる活性酸素を取り除く働
きがあることも証明されている。男性の
発生率が高く、治療が困難だとされて
いる肺癌。そして高齢化社会を迎え、ア
ルツハイマー病も大きな問題となつてい
る。つまり、天台烏薬のエキ
スから作られ
た薬は、私たち

2200年前の秦國で占術、薬学、天文学
などあらゆる知識を持ち、始皇帝までも
脅かす存在だった徐福。

記述があるものの、この人物が実在した
証拠は、どこにもない。その答えが出た
のは、今から24年前。中国のある研究
者が、史記に書かれた徐福の出身地「斉
の国琅邪」（現在の江蘇省連雲港市贛
榆県金山郷）を発見した。さらに徐福一
族の家系図が見つかり、徐一族が中国古
代伝説で崇拜される三皇五帝のひとり、
顓頊からはじまった王族の家系で、徐福
から数えて70〜73代目にあたる末裔たち
が、今も中国全土に散らばって暮らして
いることも判明した。長い間、彼らの消
息がわからなかったのは、蓬莱へ旅立つ前
の徐福の指示で、「一族が『徐』という名を
捨てていからだした。やはり、徐福の仙
薬探しの旅は、最初から異国への逃亡が
目的だったのか？ だからこそ、始皇帝
の報復を恐れて一族に身を隠させたの
だろうか……。しかし、そんな徐福に
も、読めなかつたことがひとつだけあった。
徐福たちが熊野へ到着した年、始皇帝

のとおりに中国浙江省の天台山が原産地
で、日本には江戸時代に入ってきたと言わ
れているが、それはあくまでも植物学上
の話。熊野の天台烏薬を徐福が、何らか
の方法で大陸へ送っていたとしたら……。
そんな仮説を裏付けるような「熊野の
天台烏薬の薬効成分は、中国産のものよ
り3〜10倍も濃い」という興味深いデー
タもある。
さて、徐福の墓の隣りには、江戸時代
の儒学者、仁井田好古によって建てられ
た徐福顕彰碑がある。そこに刻まれた

もある。

2003年10月、天台烏薬の
研究を続けていた岐阜大学医学部のグ
ループによって、その根のエキスを肺癌の抑
制効果があることが判明した。天台烏
薬の根は、もともと健胃や強壯の漢方
薬としては知られていたが、「漢方薬が
直接的に作用して癌細胞を抑えた」と
いう実験結果は、近代医学の常識を
覆すものだった。また、岡山大学医学部
の研究では、アルツハイマー病や老化現象

の救世主のような存在になる可能性を
秘めているのではないだろうか。

さらに、このニュースを追うように11
月には、最新機器を使った探査で中国陝
西省の始皇帝陵に地下宮殿のあること
がわかった。地下35mに隠された宮殿は、
東西170m、南北145mという規模。
発掘はまだ先になりそうだが、「始皇帝

陵には水銀の川や海がある」と史記にあ
るとおり、そこに大量の水銀が含まれてい
ることも確認されている。つまり、徐福に

繋がる一つの物事が2200年という長い
時を経て、世界の注目を集めていること
になる。次に徐福自身に関する新発見

が出てくることを期待しているのは、奥
野さんら研究者だけではない。いま、
時の流れを超えて、人々の心の中に永

遠に生き続ける男。徐福は今ごろ、空
から下界を眺めながら、ニヤリと笑つて
いるのだろうか。

徐福
渡来伝説